中越遺跡範囲確認調査報告

昭和54年3月

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

序

中越遺跡は大正の末に、鳥居龍蔵博士によって発見された。

昭和27年、藤沢宗平先生によって、第一次の発掘がなされ、爾来昨年10月の第九次発掘までに、縄紋前期初頭の住居趾が実に95軒に達し、一大集落趾であることが確認されるに至った。

此の間、八幡一郎教授や、国立奈良文化財研究所長坪井清足先生、また文化庁調査官小林達夫先生などのご指導を受け、膨大な遺物や記録の整理をすすめてまいり、近く報告書の刊行の運びとなったことは欣快に堪えない。

近時我が村も都市化が進み、宅地造成等により、この遺跡も四囲から次第に侵食されて、この儘の状態が続けば、文化財保護の見地から、憂慮すべき事態も考えられるので、永久保存の計画樹立のため、昭和53年度国県の補助事業として、中越遺跡分布確認調査を実施した。

この報告書は、その概要を纒めたものである。

初冬の寒さの中で、献身的にご尽力を賜わりました調査団長友野良一先生をはじめ、調査員各位や、県教育委員会の諸先生のご指導に対し、深甚なる敬意を表し、もって序となす次第である。

昭和54年3月

長野県上伊那宮田村教育長　林　金　茂

例　　言

1. 本書は、宮田村教育委員会が昭和53年度国庫補助事業として計画し、実施した中越遺跡範囲確認調査報告書である。
2. 調査は中越遺跡調査団に委託した。
3. 本書の執筆は、調査団を代表して友野良一が当った。
4. 調査に当り、土地の所有者ならびに居住関係の各位には、多大な御配慮を戴いたことを銘記してお礼としたい。

伊藤務・本田真・高橋清八・有加勝司・小田切鉄男・池田五郎・酒井愛子飯島金二・平沢武彦・山浦政治・大下平八・木下岩雄・松田克治・樋口正夫・伊藤柳治・江口勝三・小松浅勝・鈴木末男・下井一郎・大蔵重樹・羽場勝美・榎本義男・塩川征二・本田甲子雄・久保田秀司・近藤源蔵・矢田尊一・馬場義文・橋倉一良・小田切正義・三浦正吉・窪田譲・間山みつゑ吉沢力・立花精一・唐木保・新井正三・浦野治郎・田中吉郎・宮下富之進竹松久男・太田英聡・唐木達雄・加藤広治・川手順一・斉藤和章・清水定良・武井利夫・滝沢節男・大西清・白川達夫・竹松安義・小林昭洋・白井長治・浦野庄衛・唐沢兵二・飯島光治・片桐貞治・酒井恭一・豊岡外蔵・飯島勉・手塚弘・馬場武男・鳥羽英夫・唐木愛男・池上敏・新谷節夫・宮本芳弥・林有則・中西英夫・吉川定男・小平守・伊藤種男・長崎紀夫・間山さた子・原田丑五郎・田中宗一・飯島建一・原田美二郎（順不同）

5. 発掘に参加された方々は下記の通りである。

大沢実・小松博子・小松英男・藤川周一・墨矢勇夫・伊藤柳治・春日松巳本田甲子雄・北沢武雄・保科兼雄・加藤大八・鳥羽英夫・小松為雄・平沢八千子・小田切房子・林美弥子・小松二三子・宮沢市雄・白鳥あき子・太田利雄・春日宗・木下進・春日修一・保科義重・酒井伝恵・保科徳子

6. 整理作業で特別御協力をいただいた方々は、大平聡・辰野美佐子・小木曽清・保科徳子・丸山弥生・伊藤雅一・大沢重男・三沢恵・椎野美佐子・高井純子・墨矢勇夫の諸氏には文字通り陰の支えになって戴いたことに対し、心より深く感謝の意を表するものである。

目　　次

序
例　　言
(1) はじめに ---------- 1
(2) 中越遺跡研究のあゆみ ---------- 2
(3) 遺跡の立地 ---------- 3
(4) 調査地点の配置と調査坑 ---------- 4
(5) 土層の堆積状態 ---------- 10
(6) 遺物の包含状態 ---------- 10
(7) 遺構・遺物の状態 ---------- 12
　遺　構 ---------- 12
　遺　物 ---------- 13
(8) 結び ── 遺跡の範囲 ---------- 30

図版目次

図版 1. ①遺跡遠景（東方より）
　②遺跡遠景（東方より）
図版 2. ①遺跡遠景（西方より）
　②遺跡遠景（南方より）
図版 3. ①②③調査坑出土状態
図版 4. ①②③調査坑出土状態
図版 5. ①②③調査坑出土状態
図版 6. ①②③調査坑出土状態
図版 7. ①②③調査坑出土状態
図版 8. ①～⑧ 調査坑遺物出土状況
図版 9. ①②③調査坑遺物出土状況
図版 10. ①②③調査坑地層図
図版 11. ①②③調査風景
図版 12. 縄文前期の遺物
図版 13. 1. 2縄文中期　3. 4弥生前期

挿図目次

第 1 図　位置図
第 2 図　調査地点配置図
第 3 図　既発掘遺構図
第 4 図　土層の柱状図
第 5 図　土層の柱状図
第 6 図　土層の柱状図
第 7 図　土層の柱状図
第 8 図　土層の柱状図
第 9 図　1区出土遺物
第 10 図　2区出土遺物
第 11 図　遺跡区分図

(1) はじめに

中越遺跡の保存問題は、西原地籍の住宅用地開発計画が具体化したことによるものである。そもそも中越遺跡は、昭和30年末より20余年の長い期間にわたって、地道な学術調査が積重ねられて来た日本における数少ない縄文前期前半の大集落址である。特に東西両文化の接触が生んだ様々な文化様相が窺える点で重要な遺跡である。しかしながら、宮田村がかかえている土地利用計画も理解できる反面、この遺跡の保護保存運動との間に競合が起きるのも致し方のないなりゆきといわざるを得なかった。

昭和53年4月、関係当局から計画案が示されるにおよび、地元研究者による保存運動が表面化し、村当局に保存のための強い要望がなされた。村教育委員会は県文化課と再三にわたり保存処置について打合せを行った。その結果、国・県より補助を受け、発掘調査が行われることが決った。しかし遺跡の実態、とくに遺跡の範囲が確認されていない段階にあっては、保護保存の問題も、土地開発の問題も具体化することは困難であった。そこで県文化課の見解に従い、遺跡の範囲確認調査を実施し今後の協議・検討の基礎的資料を作ることになり、昭和53年度の国庫補助事業として今回の調査が行なわれたのである。

調査は、中越遺跡調査団を10月に結成し、事務局を宮田村教育委員会に置いた。調査団の構成は次のとおりである。

中越遺跡調査団

顧　　問	向山雅重	宮田村教育委員長
団　　長	友野良一	日本考古学協会員
調査員	丸山弥生	上伊那考古学会員
	和田武男	長野県考古学会員
	赤羽義洋	〃

調　査　員	小木曽　　清	宮田村考古友の会々長
事　務　局	林　　金　茂	宮田村教育長
	森　下　　清	宮田村教育次長
	古河原　正　治	宮田村教育委員会
	竹　松　正　恵	〃

(2) 中越遺跡研究のあゆみ

中越遺跡が遺跡として知られたのは、大正末年、鳥居龍蔵博士が「先史及原史時代の上伊那」編集のための調査の際確認され、その後、昭和２７年になって「信濃史料」編集の折、再び注目された。その頃より上伊那考古学会員による遺物の表面採集による調査が始められていた。ところが昭和３０年に宮田中学校の建設工事が行なわれると、道路の断面に多数の住居址断面が露出したのである。その際多くの土器や石器が採集されたが、その土器については極めて特徴のあるものであることがわかり、恐らく縄文前期関山式並行の特有の土器であろうと考えられるようになっこ。

昭和３１年１１月、上伊那考古学会のメンバーと藤沢宗平、樋口昇一氏らによって第１次発掘が行なわれた。この発掘では第１号住居址一軒を発掘し、他に二軒の住居址が存在することを確認するにとどまったが、続く昭和３２年３月、第２次調査が行なわれ第２号～第４号住居址を発掘し、縄文時代前期の集落址として把握されるにいたった。

その後遺跡内に宅地化が進んできたため、昭和４３年、４４年の二回にわたって広範囲な発掘が行なわれ（第３次、第４次調査）、その結果第５２号までの住居址を発掘または確認したのである（図２）。　この２回の発掘によって、中越遺跡は住居址数の多いことでは、他に類例を見ない「大集落址」とし

て確認されることとなった。この発掘の成果により昭和４５年に宮田村福祉センターで開かれた「中越遺跡をめぐる諸問題」と題する長野県考古学会第四回シンポジウムが開かれたが、結局は「土器論」に終止した形となった。その後、渡辺誠氏により研究上の方法論の欠除が指摘されることとなった。

第３次、第４次の調査以後より、大規模の圃場整備事業に伴う発掘と中央道建設のための埋蔵文化財包蔵地の調査が進められる中で、昭和５２年１２月同村内に所在する縄文時代草創期の向山遺跡の保存問題をきっかけに、中越遺跡の国指定の論議がもちあがり、中越遺跡は保存の方向に進むこととなったのである。

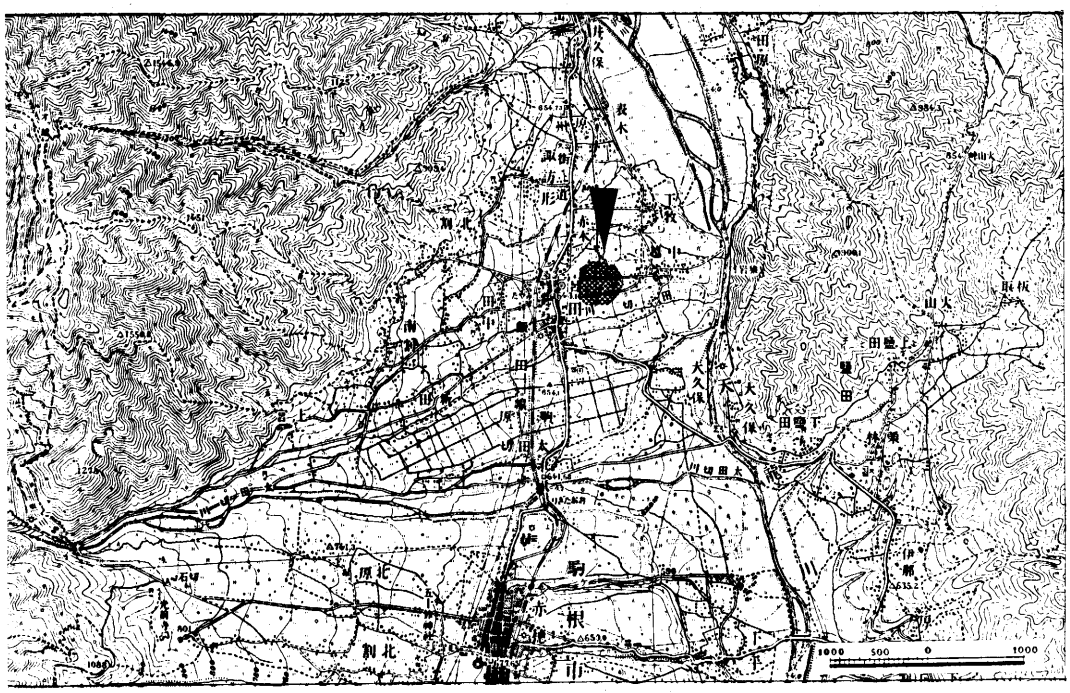
そして、昭和５１年８月、中越遺跡の本格的な整理作業を前に第５次の調査が行われ、その後、住宅建設などに伴い第７次、第８次の発掘が行われた。

中越遺跡はこれらの発見以来、特徴的な土器解明のため発掘が進められ、大規模な発掘によってその集落としての認識がなされ、第５次の調査以後は保存を前提として、研究上の方法論的な問題をも含んでの研究が進められてきた。昭和５３年度は、国・県の補助事業として遺跡範囲確認調査が実施されたが、その結果総計９５軒の住居址が発見された。中越期の遺跡の面積は約　5.４４ヘクタールに分布していることも確認することが出来た。

(3) 遺　跡　の　立　地

中越遺跡は、長野県上伊那郡宮田村中越にあって、伊那谷の他の多くの遺跡と同様、天竜川によって形成された河岸段丘上に立地する（図１）。　この中越の段丘は中央アルプスの山麓より流れる天竜川支流小田切川によって、中越遺跡の南方1.５キロメートルに位置する駒ケ原南遺跡の立地する駒ケ原段丘と

区別される。北側は同じく山麓より流れる大沢川を境に伊那市赤木・下牧地籍と行政区分がなされている。従って中越遺跡は、山麓より伸びる狭長な台地のほぼ中央やや東寄りに展開していると言える。一方駒ケ原南遺跡及び駒ケ原下遺跡は、中越の段丘と平行して同じく東西に細長く、その南側は中央アルプス木曽山脈の主峰駒ケ岳より流れる大田切川によって深く開析され、伊那谷特有の典型的田切地形を呈し、現在でもなお交通の重大な障害となっている。



第1図 遺跡の位置図

(4) 調査地点の配置と調査坑（第2図）

過去の調査の知見から、中越遺跡の中心部は、現宮田村役場の東北部で、北は大沢川右岸河成段丘上まで、東は伊那市西春近の赤木・下牧両部落に通ずる道路（通称赤木線）まで、南は中越北線道路まで、西は現平沢製作所に通ずるあぜ道まで約1.6ヘクタールくらいと考えられていた。

しかし、その後の分布調査の結果、もっと広い地域に分布していることが確

認された。そこで、今回の範囲確認調査では、それらの区域まで調査を拡張することにした。

この対象地区の中で、赤木線の東側一帯は、一応遺跡を避けたということで、昭和４０年以来、住宅が急ピッチで建てられてきた。この住宅地域の調査は困難であったが、それでも許される範囲で、庭先までも場所を選んで調査した。

今回の調査は、既調査区を極力避け、未調査区域に重点をおき、大きく３地区に分けて実施した。

第１区は、前述のかつて遺跡中心部と考えられていた既調査区域の東側と西側。

第２区は、第１区の東側より中越神社西までと、中越北線 ― 中越南線にはさまれた地域の大部分。

第３区は、中越南線と小田切川左側河成段丘上までであるが、今回の調査からは除外した。

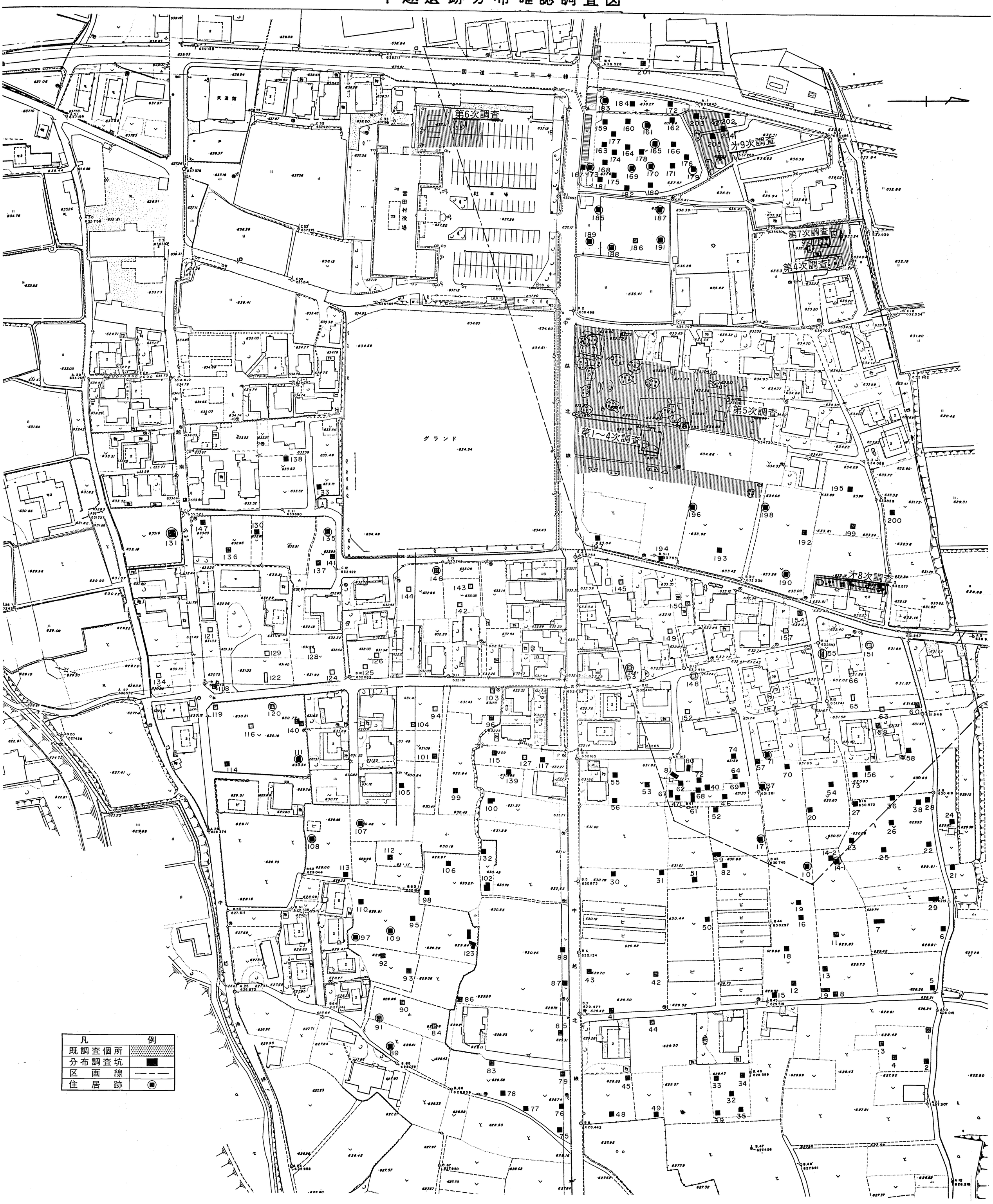
調査の基準は、国道１５３号線バイパスと中越北線が交叉する点を基点として、中越北線の道路北端を東にむけ、これを基線とした。この長さは５６０ｍあるが１０ｍごとに南北に区切った。次にこの基線に対し垂直（東西）に１０ｍごとに区切り基線をＮとし、南からＡ～Z_4 まで30区切りした。　これによってできる１０ｍ×１０ｍのグリットの名称を調査坑の位置名とした。調査坑は２×２ｍ又は１×４ｍである。

調査は整理上、第１地区と第２地区に区分したが、第１地区の調査坑は次のとおりである。

10. 14. 17. 20. 23. 27. 37. 40. 46～47. 54. 57～74. 80～82. 145～155. 157.～205までの82坑を設置した。

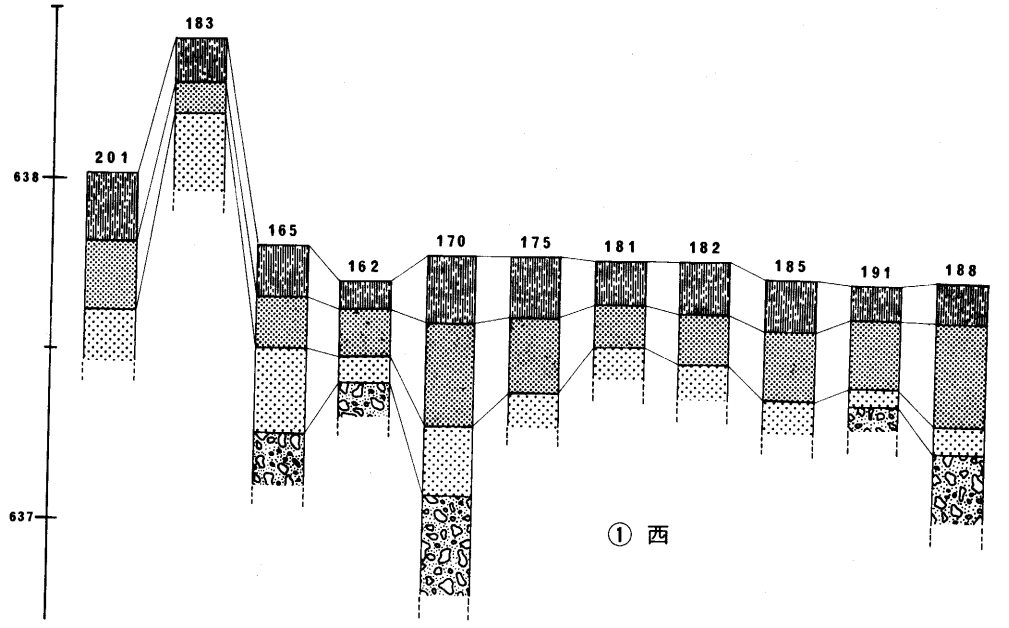
第２区調査坑は１～9. 11～13. 15～16. 18～19. 21～22. 24～26. 28.～26. 38～39. 41.～45. 48～53. 55～56. 75～79. 83～144. 156の113坑を設置し、両地区で合計205坑である。

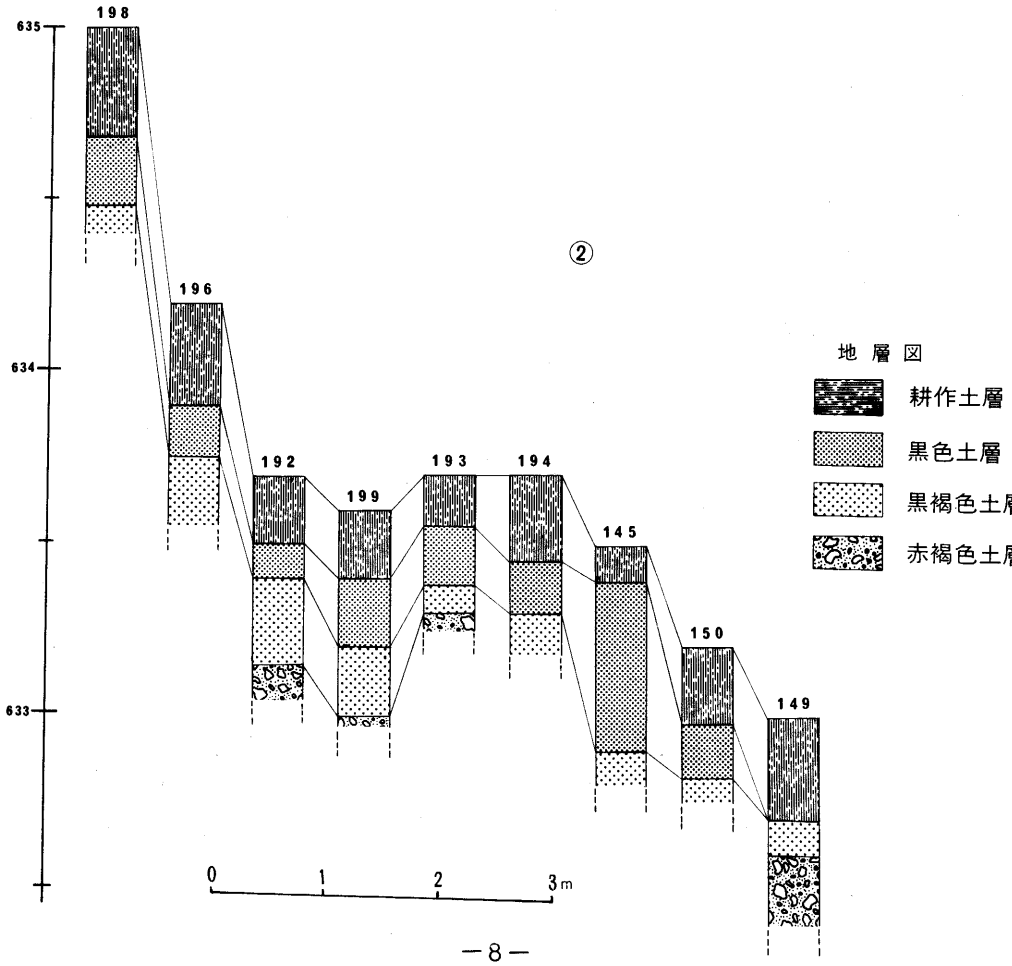
中越遺跡分布確認調査図

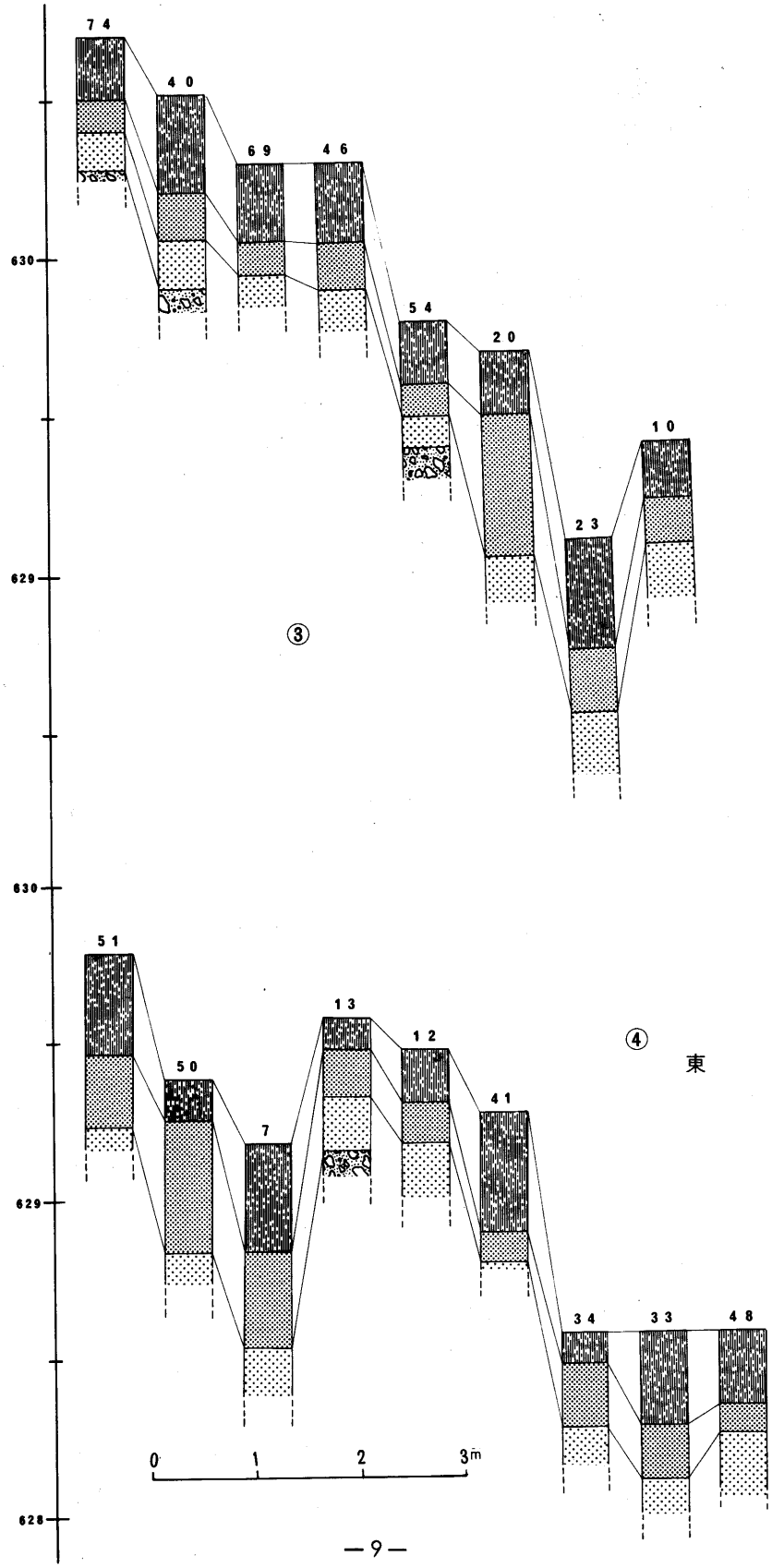


中越遺跡遺構配置図

国道一五三号線
中越北線
グランド
第1次~4次調査
第4次調査
第5次調査
第6次調査
第7次調査
第8次調査
第9次調査
0 10 20


638
637
201
183
165
162
170
175
181
182
185
191
188
① 西


635
634
633
198
196
192
199
193
194
145
150
149
②
地 層 図
耕作土層
黒色土層
黒褐色土層
赤褐色土層
0
1
2
3m


74
40
69
46
54
20
10
23
630
629
③
630
51
50
7
13
12
41
④
東
629
34
33
48
0
1
2
3m
628

(5) 土層の堆積状態　（図4，5）

土層は主に調査坑の北壁を主として実測したが、調査の都合上他の壁をした例もある。

調査区域が相当広範囲にわたったので、全坑表示が妥当と考えられるが地形状から今回は中越北線にそって東西の堆積状態を表示した。調査坑のレベル基準は第一層上面で行なった。第Ⅰ層は耕土で20～40㎝黒色土。第Ⅱ層は耕土の下部で耕作が行なわれていない層で黒色土。

水田の場合は耕土の下に10～15㎝厚さの地場層が入る。第Ⅲ層は、場所によって異なるが20㎝内外で黒褐色土層である。Ⅳ層はこれも場所によって差異はあるが、平均して20㎝前後である。第Ⅴ層はローム層である。ローム層は一定していない。第Ⅵ層は古期ロームを含んだ砂礫層である。

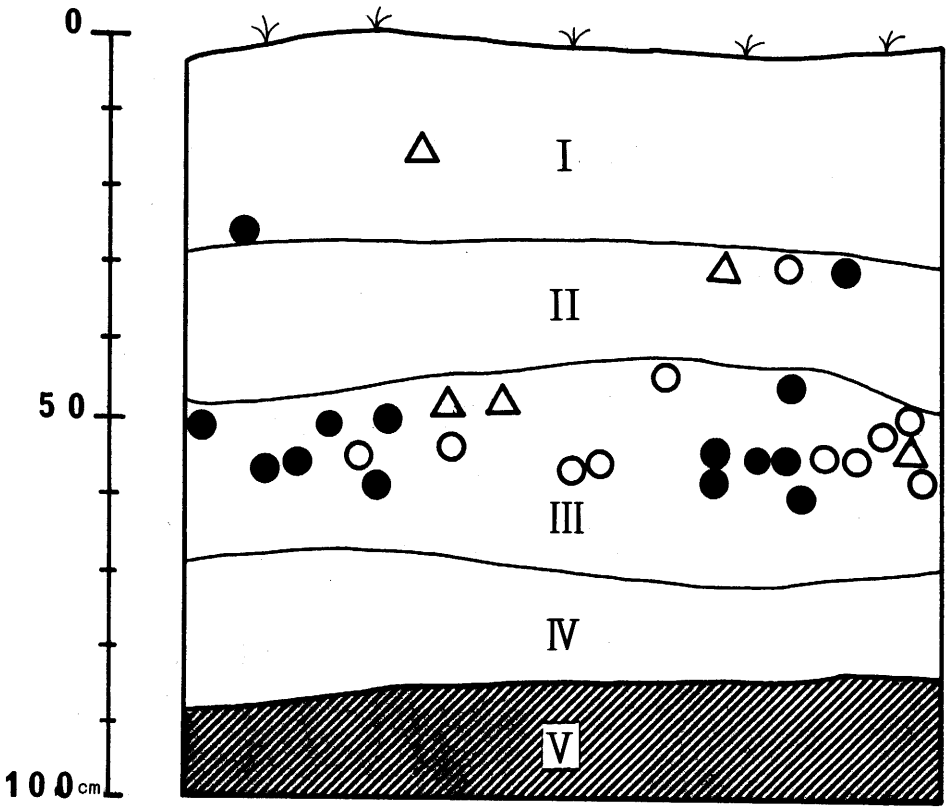
遺跡地の傾斜は、東に2％北に1％の角度をもった地形の上に立地している。

(6) 遺物の包含状態　（図6）

土層は主に調査坑の北壁を主として実測を行なった。今回の調査区域が相当広い範囲に及んだので、調査坑全体を図化することは困難であることから、柱状図は遺跡の中央を東西に徒る中越北線に添って設置した。

土層の標高の測定個所は主に北壁にしたが、特定の個所については、その個所で定めた。

土層の標準断面は70坑を採用した（第6図）。第Ⅰ層は耕土で20～25㎝黒色、Ⅱ層は15～20㎝黒色土縄文中期、縄文前期の土器が認められた。Ⅲ層は20～30㎝黒褐色土層で、縄文中期と前期が混じって検出されるが、縄文前期の遺物の方がやや下層に分布している。Ⅲ層の下部にはほとんど遺物は認められない。Ⅳ層は12～20㎝で赤褐色土層で、遺物は全く認められなかった。Ⅴ層はローム層である。



調査坑 70　　S＝1：10

凡　例
● 縄文前期
○ 縄文中期
△ 石　器
▨ ローム層

第6図　第70坑遺物分布図

(7) 遺構・遺物について（図2. 8. 9 図版3. 4. 8. 10. 12.）

1. 遺　構

a、1区について（図2. 8、図版3. 4. 8. 10. 12.）

本地区の面積は5.4ヘクタールである。調査が行なわれたのは合計90坑であり、そのうち住居址が確認されたのは次のとおりである。

第1表　　A　縄文前期の住居跡

住居跡番号	64	65	66	67	68	69	70	73	74	75	76	77	78	79	81
調査坑番号	179	161	165	183	170	170	169	173	185	185	187	187	189	191	190

B　縄文中期の住居跡

住居跡番号	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
調査坑番号	196	188	196	198	151	155	188 148	148	153	71	37	17	10	14

これにより、1次調査より今回の分布確認調査まで合計92軒の住居址を調査することができた。その外土壙・配石・ピット・マウンド等の遺構も確認している。

b、2区について（図2. 9、　図版4. 5. 6. 7. 8. 10. 13）

2区は1区の東側と南側に分布する地域である。面積は13ヘクタールの広い地域をわたっている。そのうち住宅とか工場地帯が三分の一を占めている地区である。今回の調査では住宅と住宅との空地にも許される範囲で調査坑を設置して、この区域の分布傾向を見る様に計画した。調査坑は合計115坑で、そのうち住居址として認められたのは、89. 91. 107. 108. 109. 111. 120. 131. 135. 146の10軒である。

2区内の南端に位置していた第97坑は後期の住居址であることが確認されたが、これは3区の区画に入るのかもしれない。また、第120坑から図版8で見るような後期の注口破片が出土している。その外、第102坑の土壙からは条痕文を施した弥生前期の壺と小形の甕（図版9－1. 2、13－4）

が捨てられた状態で発見されている。これらの事実から２区と３区の境はある巾をもって交叉しているように考えられる。

2. 遺　　物

a、１区について

調査区域における遺物の分布状態は、「調査坑別遺物出土一覧表」で判断できるが、さらに詳細に考察してみると、赤木線より東の畑地区の第２0. 37. 46. 70. 74　の調査坑に遺物密度が高かった。特に第７０坑では中越Ⅰ群の土器が５０片、Ⅱ群、Ⅲ群の土器が各２片出土し、Ⅰ群のものが圧倒的に多かった。しかしこの地区全体ではⅠ群とⅡ群に属する中越期では古いとされている土器はほぼ同数検出されたのに対し、新しいとされるⅢ群の土器は殆ど発見されなかった。このことは、この地区が神の木期の分布範囲でないことを示している。

次に第１４８坑についてであるが、ここからはⅠ群７片、Ⅱ群１片とⅠ群が多く、１５２坑では。Ⅰ群４片、Ⅱ群６片とほぼ同数であった。これらについても前述の傾向と同じであるといえる。

これに対し、１５１坑ではⅠ群２片、Ⅱ群１片に対し、Ⅲ群は９片と多かった。　このようなⅠ・Ⅱ・Ⅲ群が混交して発見される地域は、１次～４次の調査地域であり、これは中越期でも新しい時期であるが、１５１坑もその類似地域と考えられる。

しかしながら、これら３坑とも住宅密集地の中の僅かな間隙を縫って調査できた程度であり、住宅の下にはたして遺跡、遺物が残存しているか心配される。

次に第１次～４次調査地区より西側の、国道１５３号線バイパスまでの地区においては第１５９～２０５坑まで合計３７坑を調査した。

そのうち、Ⅰ郡のみの坑はほとんどなく、Ⅰ・Ⅱ群の土器を共伴する坑は第169. 170. 175. 179. 180. 185～189. 191の合計１１坑である。特にⅢ群の土器を多く出土するのは第１８８坑で、土器の５６％がⅢ群の土

器でしめられている。このことは、第2次調査での2号住宅地附近の出土状態に似ている感がある。

第1～4次の調査区域の東側赤木線までの間に未調査個所があったので、この間に第192～200坑まで9個所の調査坑を設けて調査を行なったところ、第192. 195. 197. 200坑ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ群の土器が共伴した。その他193. 194. 196. 198. 199の5坑からは、Ⅲ群の土器は少なくⅠ・Ⅱ群のものが多かった。この地区内の遺物の分布状態はⅠ・Ⅱ群が集中するところと、Ⅲ群が多いところと小区分があることが予測される地区である。あるいは、この地域には第8次調査の時発見された土壙、マウンドなどが分布しているところより、住居址以外の遺構が存在する地域かも知れない。

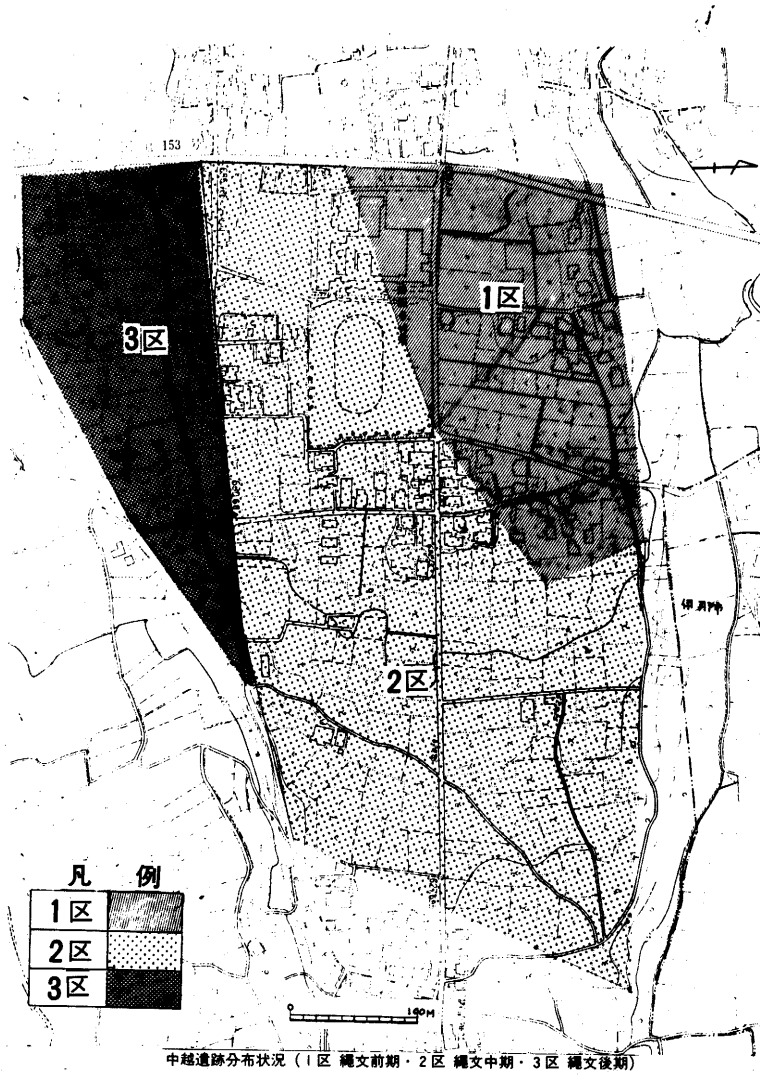
そのほか、少量ではあるが、縄文中期土師、灰釉、中世陶器などが発見された。

2区の遺物について、本地区の遺物は「調査坑別遺物出土数一覧表」で理解することができるが、総してみると、ほとんどの坑から縄文中期中葉と後葉の遺物が出土する。そして、115坑中住居址が確認されたのは、89. 91. 107. 108. 109. 111. 120. 131. 135. 146.坑で、その数は10軒で調査坑との比率は約1割に達する密度を有していることに注目しておかなくてはならない。

後期の住居址は97坑である。これより南は3区で縄文後期の遺跡である。特にこの区域で注目しなければならないのは102坑の土壙中より発見された弥生前期の土器であるが、この附近には縄文晩期も弥生時代の遺物も発見されていないことで問題になることである。今後の調査にまちたい。

図版の遺物について（図7，8）

今回の調査で発見された遺物について簡単に説明すると、中越遺跡の遺物の分類については、現在五次～九次の整理が終らない段階では正式な編年は決定できないので、今回の報告では、中越期の土器を大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ群に区分した段階で報告するが、各群はさらに数類に細別される予定である。



中越遺跡分布状況（1区 縄文前期・2区 縄文中期・3区 縄文後期）

第2表調査坑別出遺物出土数 (1)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄後	文期	縄文							石	石	石	石	打	磨	黒	横刃型	礫	鉄	木	
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半	晩期							鏃	錐	垂	匙	斧	石	耀石	石器	器	片	炭	
	1							1																				
	2																											
	3																											
	4					1															1							
	5														1													
	6					1																			1			
	7																				2							
	8																											
	9																											
1	10	19	3								(2)	1											5		1			
	11																									1		
	12																											
	13																											
2	14	1	2																		1		2					
	15		1																1									
	16		1												1								2					
3	17					2									2								4		2			
	18																											
	19																											
4	20	1	4			7																3	2		1			
	21											1																
	22											1		1	2													
5	23														2													
	24																											
	25					1																	1					
	26														1										1			
6	27														1							1						

(　　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数 (2)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文晩期							石鏃	石錐	石垂	石匙	打斧	磨石	黒耀石	横刃型石器	礫器	鉄片	木炭	
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半																			
	28																											
	29			1											1													
	30																											
	31					1																						
	32					1																1						
	33					2																						
	34																											
	35														1						1							
	36															1												
7	37	5	7			1								1	1		2					3	6					
	38																											
	39																											
8	40					2																						
	41						14					3									1	1						
	42																											
	43					4	81					1			1	1					3	4	2					
	44	1																										
	45						2					1																
9	46	2	4			6	3								1						2		5					
10	47	1	4				2					1										2						
	48						1																					
	49																											
	50	1																			1							
	51	4	2				16																2					
11	52																											
	53	8	4				2															2	3					
12	54		1																				2					

(　　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数 (3)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文晩期																		
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半								石鏃	石錐	石垂	石匙	打斧	磨石	黒耀石	横刃型石器	礫器	鉄片	木炭	
	55	1		1			2																1					
	56		2				4														1		2			2		
13	57																											
14	58														1													
	59																					2						
15	60																											
16	61						3																					
17	62						1								1							1	1					
18	63		1																				2					
19	64	1	4				1																4					
20	65		1																									
21	66																											
22	67																											
23	68														1								2					
24	69		2												1								1					
25	70	50	2	2		3									1						1	3	1					
26	71		2				3														1		1					
27	72														2								1					
28	73																											
29	74	3	6				3								2						1	1	3					
	75			1			8																					
	76						6	1																				
	77						14									1					1	3						
	78						2								1													
	79																											
30	80	1	1				3								1													
31	81						1																1					

(　　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数 (4)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文晩期																		
		I群	II群	III群	前半	中	後半	前半	後半								石鏃	石錐	石垂	石匙	打斧	磨石	黒耀石	横刃型石器	礫器	鉄片	木炭	
	82	3	1				9																3		4			
	83	1					16																					
	84						72															3	1		6			
	85						20														1	2	2					
	86																											
	87						15		1						1						1							
	88						2														2	1						
	89						43								1							1			3			
	90					2	5																1		2			
	91					2	54		(2)												2	2	1					
	92					4	56														2	1	2					
	93					4	21														5	2	1		1			
	94						14														1							
	95				1	5	156					1									1	4	2					
	96					1	1															1						
	97				1	7	137								3			1			1	1	5		1			
	98				1	28	937														17	6	3					
	99					4	45															1						
	100														2													
	101						11								1						2							
	102										(2)																	
	103	1	2			3	7														1	1						
	104				1	15	13														2							
	105					2	23					1									1							
	106		3		8	37	184													1	4							
	107						136					1		1	1					1	1							
	108						27														1	1						

(　)内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数 (5)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器										その他		
		縄文前期			縄文中期			縄後	文期	縄文							石	石	石	石	打	磨	黒	横刃型	礫	鉄	木	
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半	晩期							鏃	錐	垂	匙	斧	石	耀石	石器	器	片	炭	
	109						256														11							
	110					1	135					1						1			2		2					
	111				2	10	126		6												10	1						
	112					4	8														1		2					
	113						26											1			1							
	114				6	1	178														2		2					
	115																											
	116				1	2	36					2		3								1						
	117																											
	118					4	18					2		1							1							
	119																											
	120						30	3						2			1					6	3					
	121					2	49														2	1						
	122						38					6	2	1							3							
	123					1	22								5						1		1					
	124																											
	125																											
	126					3	13	1							1						1		1					
	127														1													
	128				1	18	140													1	3	2						
	129						21														2		2					
	130	1				1	33						1										1					
	131				1	9	57	4							1						5	2	3					
	132																											
	133		1			2	59														2	4						
	134						1														1							
	135					20	190	2						1								8	1					

(　　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数(6)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文晩期																		
		I群	II群	III群	前半	中	後半	前半	後半								石鏃	石錐	石垂	石匙	打斧	磨石	黒耀石	横刃型石器	礫器	鉄片	木炭	
	136						60	1													2							
	137					1	37	3														1						
	138						60													1			2		2			
	139																											
	140						14						1	3	2								2					
	141					1	81														5	3	2					
	142						1																			2		
	143						1																					
	144					3	1																					
32	145																											
	146					6	37															1						
	147	13	3			8	26	1													2	3	1					
33	148	7	1																				2					
34	149	2	4									1				1								1		1		
35	150		4	1																		1						
36	151	2	1	9																								
37	152	4	6																		1		1					
38	153	4																				1	1				1	
39	154																											
40	155																											
41	156															2												
42	157																											
43	158																											
44	159																											
45	160																											
46	161																						1		2			
47	162																						1					

(　　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数(7)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄後	文期	縄文							石	石	石	石	打	磨	黒	横刃型	礫	鉄	木	
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半	晩期							鏃	錐	垂	匙	斧	石	耀石	石器	器	片	炭	
48	163		1																									
49	164																											
50	165	2	11																				10					
51	166	1	5										1		1													
52	167	1	1				1														1		1					
53	168	1																										
54	169	21	20	2																			2		1			
55	170	11	58	10													1					1	51					
56	171	1	8	1																1			2					
57	172																											
58	173	1	6				2																1		1			
59	174	1					1								1								1					
60	175	8	32	10																		2	8					
61	176	10	11			1																	1					
62	177													1									1					
63	178		5																	1	2		6					
64	179	2	19	4			2								2					2			16					
65	180	15	73	8																		1	20					
66	181	1	20												1						1		9					
67	182		4																		1		2					
68	183		4				1																					
69	184		1																		1							
70	185	11	9	4													1				1		17					
71	186	7	14	18																			10					
72	187	3	24	25								1										1	22					
73	188	42	181	299								1					2					4	38		1			
74	189		4	16		4																1	9					

(　)内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数(8)

整理番号	調査坑番号	縄文土器									弥生(前)	土師	須恵	灰釉	陶器	内耳	石器									その他		
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文晩期							石鏃	石錐	石垂	石匙	打斧	磨石	黒耀石	横刃型石器	礫器	鉄片	木炭	
		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	前半	中	後半	前半	後半																			
75	190	12	19									1											1	1	1			
76	191	18	32	113																1		1	28					
77	192	9	34																			1	16					
78	193	4	9	2																			5					
79	194	12	22	1																			7		3			
80	195	9	15																			2						
81	196	49	23	5																		2	7					
82	197																								2			
83	198	18	64	1											1						3		11		1			
84	199	6	14	2			1									1							6					
85	200		2											1														
86	201						1																1					
87	202																											
88	203																											
89	204																											
90	205																											
合計		413	825	536	23	248	3939	17	7 (2)	0	(4)	27	5	16	51	7	7	3	1	9	130	105	417	1	36	6	1	0

(　)内は個体数

出土遺物について

第Ⅰ群土器〔縄文前期の土器〕　（図8）

1は１０４坑出土。器壁は0.3～0.5cmほどの薄い土器で指痕を有し、精選された胎土で堅く焼成されている。器形は深鉢形と思われる。縁帯部に半截竹管を使用した細線を縦位、斜位に施している。頭部は同一施文具で左から右に強く押引いている。

2は７０坑出土。器壁は0.2～0.4cmの薄手指痕文土器で精選された胎土で堅く焼成されている。器形は深鉢形と思われる。縁帯部に半截竹管具により鋸歯文状に施文されている。口縁部の刺突は左から右へ押引いている。

3は１９２坑出土。器壁は0.25～0.3cmの薄手指痕文土器。胎土は良好で堅く焼成されている。

4は１９５坑出土。3の土器とほとんど同じものである。

5は１６９坑から出土。器壁は0.25～0.3cmの薄手指痕文土器である。器形は深鉢形と思われる。器面には半截竹管具にて斜位に施文されている。口唇部に押引き状の刺突文を施す。

6は１６９坑から出土した土器で、5の土器と同類のものである。

7は１６９坑から出土した土器である。器壁0.3～0.5cmの薄手指痕文で、口唇部に左から右の方向に刺突による押引文が施されている。器面は半截竹管具により鋸歯状に施文されている。縁帯部と胴部との境は隆帯状に高くして、しばしばつまみあげたような刻み目を施す。隆帯は粘土紐の貼付によるのではなく、縁帯部をつくる粘土枝を胴部上の端の外側に少々重ね合せて接合したのではないかと思われ、接合の強度を増すのも兼ねて、装飾的に刻み目を施したのではなかろうかと思われる。

8は１７９坑出土。口縁部で器壁は0.4～0.5cm、薄手指痕文の土器。色調は赤褐色で、胎土は精選され焼成良好。器面にはわずかに擦痕が認められる。

9は１９０坑出土。器壁は0.6～0.8cmと中厚手で、口唇部の下方に4～

4.5 cmの巾に縁帯部が作られている。この縁帯部には4条1細の植物の茎状のもので細線を縦位、斜位に施している。縁帯部と胴部との境は前述7の手法と同様なやり方で接合させている。

10は185坑出土の波状口縁の土器である。器壁は0.4～0.5 cmの中厚手で指痕があり、縁帯部には4条の並行波線文が1.0～1.2 cmの間隔で斜位に交叉する方法で施文されている。縁帯部の中は4.8 cmで、胴部と縁帯部の境には縁帯部を施文したのと同一器具で縦に押圧したと思われるあとが認められる。

11は176坑出土の土器で10とほぼ同類のものであるが、口唇部に荒く篦状器具で刻み目が施されているところが異なるところである。

12は148坑出土の土器。器壁は0.5 cmで口縁部と縁帯部の巾は4.5 cmで器面には1本または2条の細線が斜めに交叉する状態で施文されている。縁帯部と胴部の境は隆帯部をつくり、その隆帯部には篦状器具で斜めに刻み目目が施されている。

13は153坑から出土した土器である。器壁は0.4～0.6 cmと厚目のもので、12とほとんど同じ系統である。12の隆帯より高く刻み目も大きい。口唇部に篦先でひいた刻み目がある。

第Ⅱ群土器〔縄文前期の土器〕　（図8）

14は180坑出土の土器。器壁は0.6～0.8 cmで波状口線の中厚手である。口縁部下頭部までの間に左右から引かれた幾条かの沈線は菱形の文様を描き出している。中越特有の文様である。

15は170坑出土の土器。器壁は0.6～0.8 cmの中厚手、口縁は波状口縁で垂下隆帯のある無文のもので、器形も14とは異なり頭部のくびれの少ない土器であるが、15の土器と同じものである。

第Ⅲ群土器〔縄文前期の土器〕（図8）

17は１７０坑より出土した土器で、器形は0.6～0.8㎝の中厚手平底深鉢形と思われる。口縁部に左から右へ先が二つに割れた棒状の刺突文が施され、その下部に１０㎝の無文帯をめぐらし、その下に３㎝の斜縄文、２㎝の無文帯斜状文といった文様構成である。

18は１５１坑出土の土器である。器壁は0.4～0.6㎝で、繊維を含んだ斜縄文の深鉢形である。

19は１５１坑出土の土器である。器壁は0.4～0.6㎝、縦位に単節の縄文が施されている。

20は１８０坑出土の土器。器壁は0.6～0.7㎝で結節の羽状縄文を施文した平底深鉢形と考えられる。

21は１８５坑出土の土器である。器壁は0.4～0.5㎝の復節斜縄文を施した平底深鉢形である。

22は８１坑から出土した土器。器壁は0.6～0.7㎝の羽状縄文である。

23は１８５から出土した土器で、文様は斜状文である。

24は１８０坑、**25**は１７０坑出土の羽状縄文の土器である。

26は１７５坑出土の土器で、器壁の厚さは0.6～0.7㎝。一部の表面をのこして大部分剝ぎ落し、その一部に先を数条に割った施文具で押引いた文様が窺える土器である。

27は１８８坑より出土した土器で、器壁は0.6～0.8㎝。口縁部文様は口縁部の下部から長さ1.2㎝の巾で左から右へ３条爪形文が施文されている。

28は１７５坑から出土した土器で、器壁は0.6～0.7㎝の口縁部で、口縁にそって長さ0.8～0.9㎝の連続爪形文が一条施され、その下は無文帯の土器片である。

縄文中期の土器（図9、2区出土）

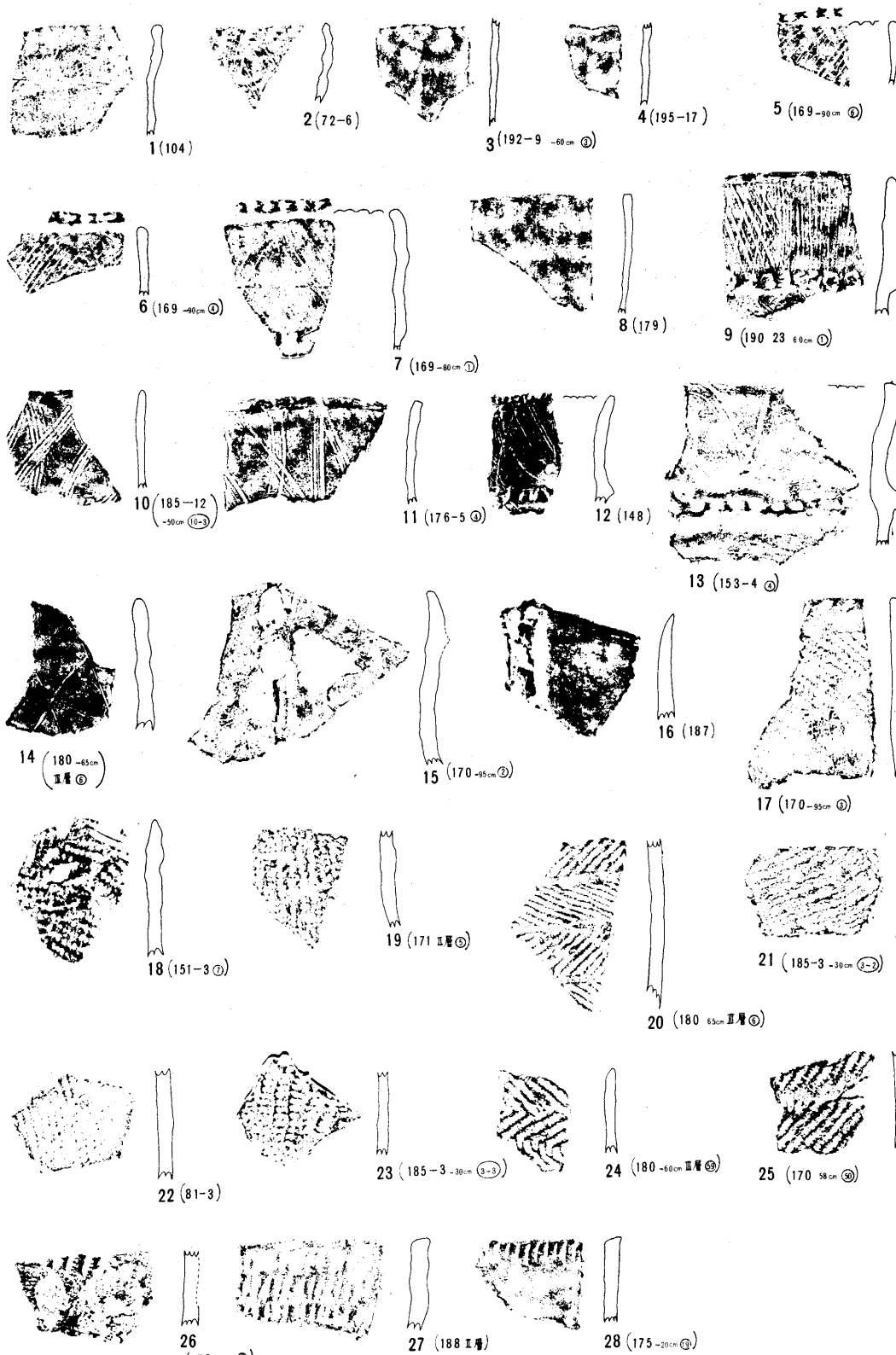
1は46坑、**2**は43坑、**3**は１０６坑出土の土器である。文様構成から勝坂式に比定されるものと考えられる。

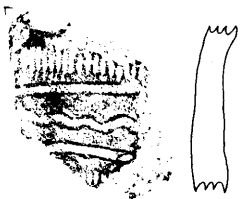
4は１１１坑出土。縄文中期の初頭に位置付される土器である。

5は１２８坑、**6**は１０９坑出土の土器で、井戸尻式に比定される。

7は９８坑、**8**は１０７坑出土の土器で、いずれも粘土紐を縦位、横位に貼付けあり、縄文中期後葉の古いところに位置付けられる。

9は8坑、**10**は１１１坑出土の縄文中期末の中頃に位置する土器である。


1 (104)
2 (72-6)
3 (192-9 -60cm ③)
4 (195-17)
5 (169-90cm ⑤)
6 (169 -90cm ④)
7 (169-80cm ①)
8 (179)
9 (190 23 60cm ①)
10 (185-12 -50cm (10-3))
11 (176-5 ④)
12 (148)
13 (153-4 ④)
14 (180 -65cm Ⅱ層 ⑥)
15 (170-95cm ②)
16 (187)
17 (170-95cm ③)
18 (151-3 ①)
19 (171 Ⅱ層③)
20 (180 65cm Ⅱ層⑥)
21 (185-3 -30cm (3-2))
22 (81-3)
23 (185-3 -30cm (3-3))
24 (180 -60cm Ⅱ層(59))
25 (170 58cm (50))
26 (175-20cm ①)
27 (188 Ⅱ層)
28 (175-20cm (13))



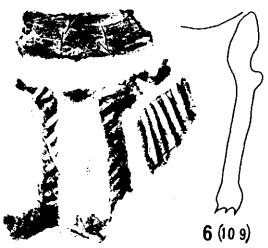
1 (46−9)

2 (43−44)

3 (106−68)

4 (11−11)

5 (128−21)

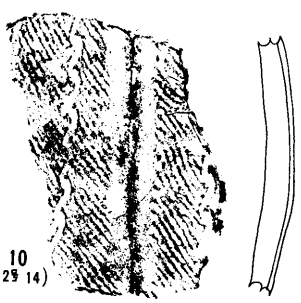


6 (109)

7 (98)

8 (107−7)

9 (8−5)



10
(111 29 14)

(8) 結び（遺跡の範囲）

以上論述してきた結果、調査の目的である遺跡範囲の想定を試みるならば、次のようにまとめられるであろう。本遺跡は大きくは１区（縄文前期）、２区（縄文中期）、３区（縄文中期・後期）の３地区に区分することができていたが今回の調査のねらいは１区の縄文前期と２区の縄文中期の区域の範囲を明らかにすることに焦点を絞って調査を行なった。

１区の西限が国道１５３番線バイパス線あたりに求められることは、遺物の出土状況から推して論をまたないところである。同様にして東限は中越北線の北第１０調査坑の地点附近として大過ないと考えられる。次いで南北の範囲をみるならば、北限は大沢川の右岸段丘上までで、南限は宮田村役場の食堂北隅—中央グランド北西附近 — 中越北線と赤木線を交叉する地点 — 第６７坑をを結ぶ線であることが、遺物の出土状況から推して考えられる。次いで１区縄文前期の分布範囲は、東西３７０ｍ、南北１６０ｍ、面積約5.4ヘクタールにわたることが確認された。また、遺物の包含層は、第Ⅲ層黒褐色土層中に集中していることも合せて確認された。（第６図）

２区の西限は、国道１５３号線まで。北限は１区と境をなしたあと大沢川右岸を東進する。東限は中越諏訪神社付近まで。南限は中越北線とほぼ平行であその面積は約１３ヘクタールに達する広大な遺跡であることが確認された。

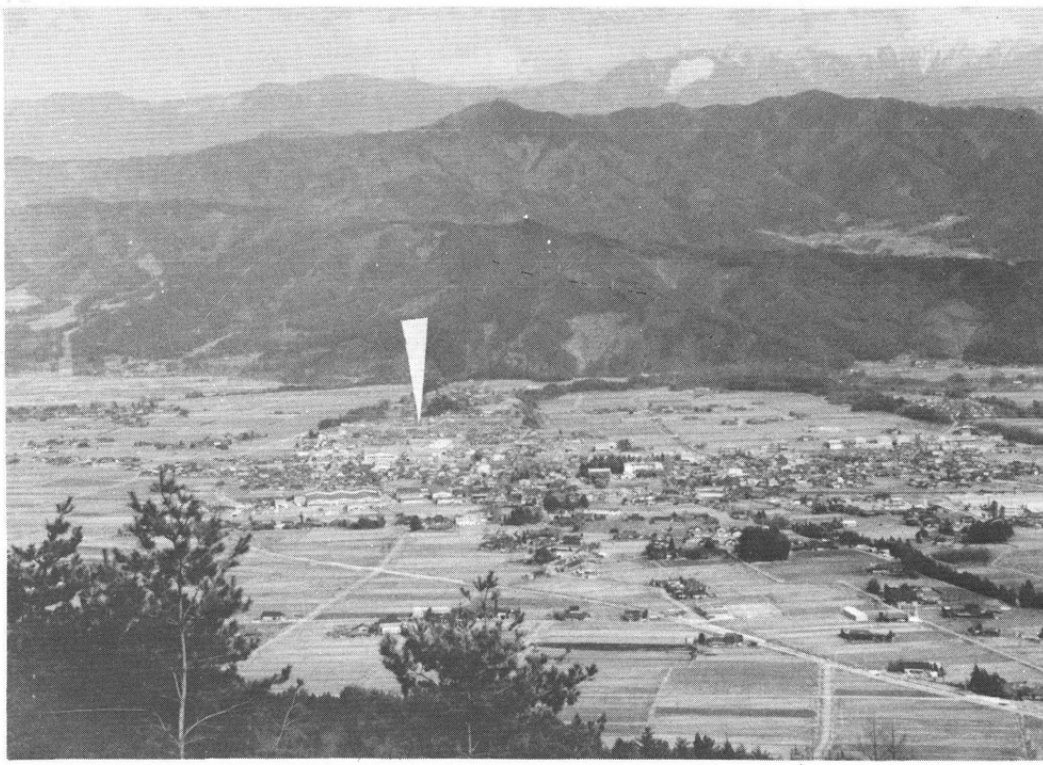
今回の調査では２区までで、３区（縄文後期）の地区迄にはおよばなかった。

既調査と今回の調査を通じて知り得た重要な事項の二、三をあげるならば、まず第一に縄文前期の集落の規模がわかったこと。第二は縄文前期初頭に位置する集落が既調査の西北と赤木線の東にあり、中心の既調査区域には、縄文前期初頭の集落に神之木期の集落が重復した形となっていることが確認された。なお、この区域内には土壙及びマウンド等が発見されていることから、本遺跡を全般的に調査することができ得るならば、空閑部分も含め集落としての全機能の構成が明らかにすることができるだろう。

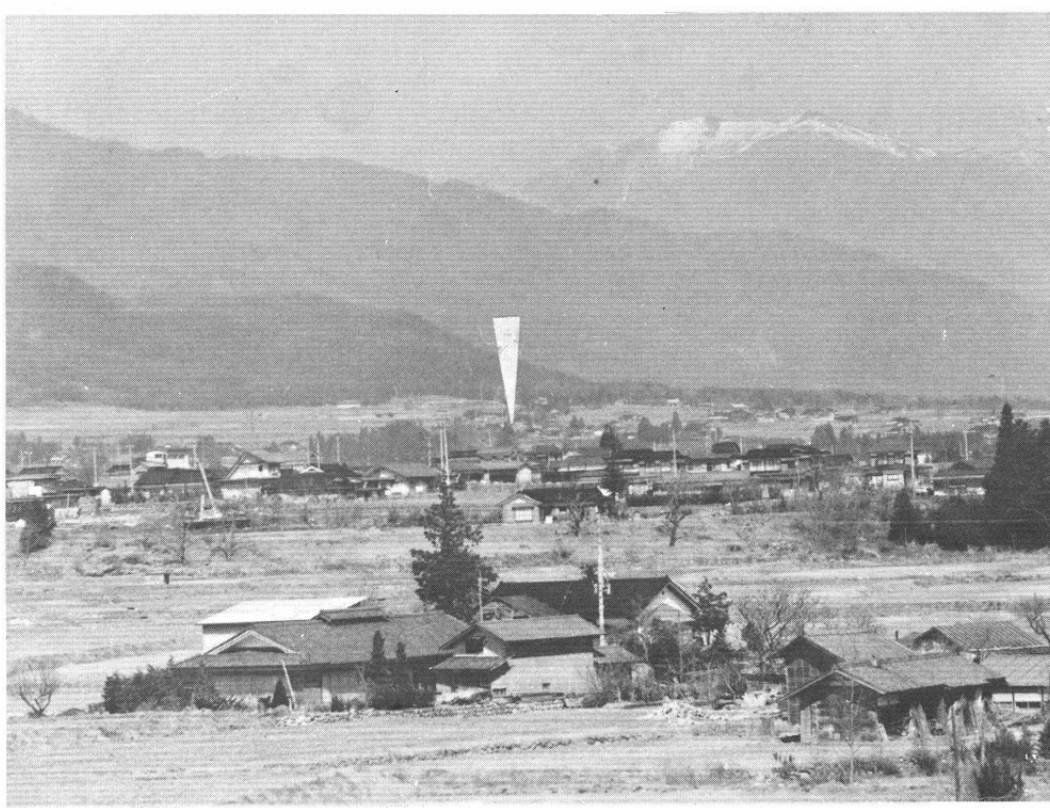
終りに、中越遺跡がどのような形で今後保存されるようになるか、未だ予知できる立場ではないが、保存の必要性を提唱した者としてもっと具体的な保存と活用の方策を立てて世に示し、理解を深めてもらわなければならない責務があることを自己に言い聞かせ、結びの言葉に代えさせていただきます。

① 遺跡遠景（東方より）

② 遺跡全景（東方より）

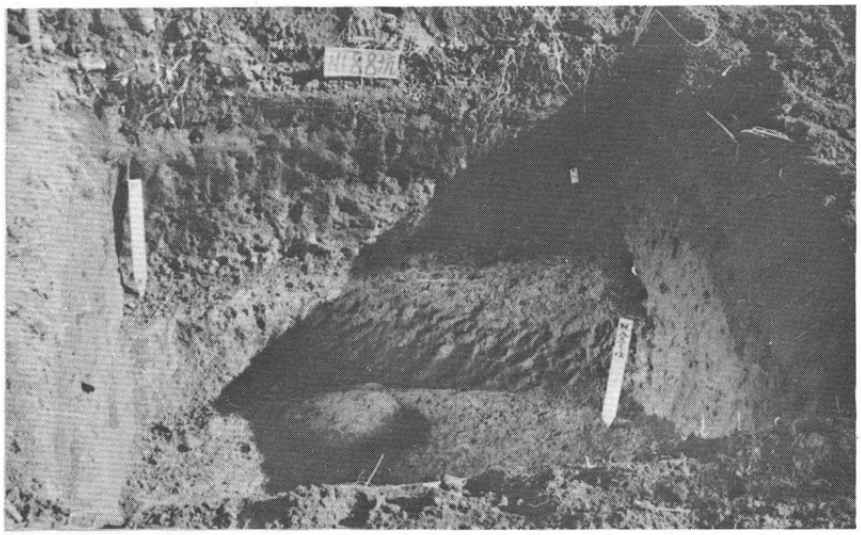


① 遺跡遠景（西方より）

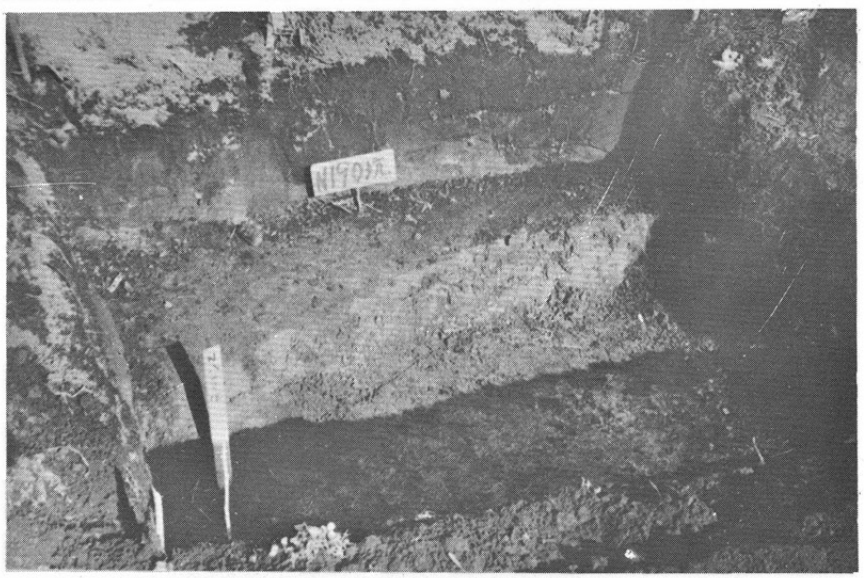


② 遺跡全景（南方小田切川の段丘上）

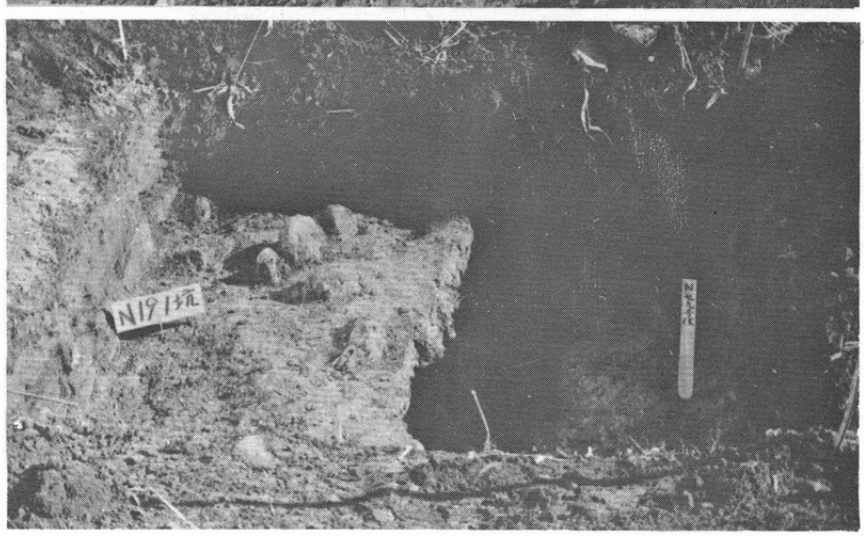
図版3



①188調査坑
83号住

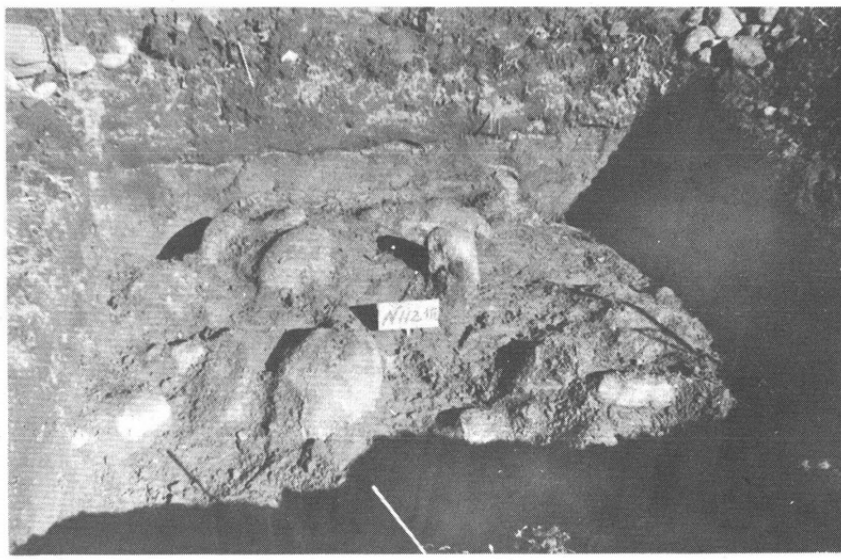


②190調査坑
81号住

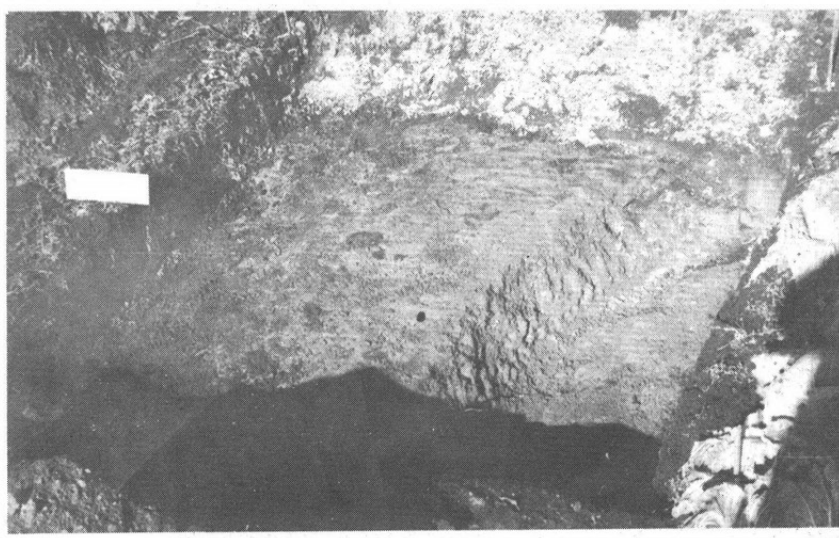


③191調査坑
79号住

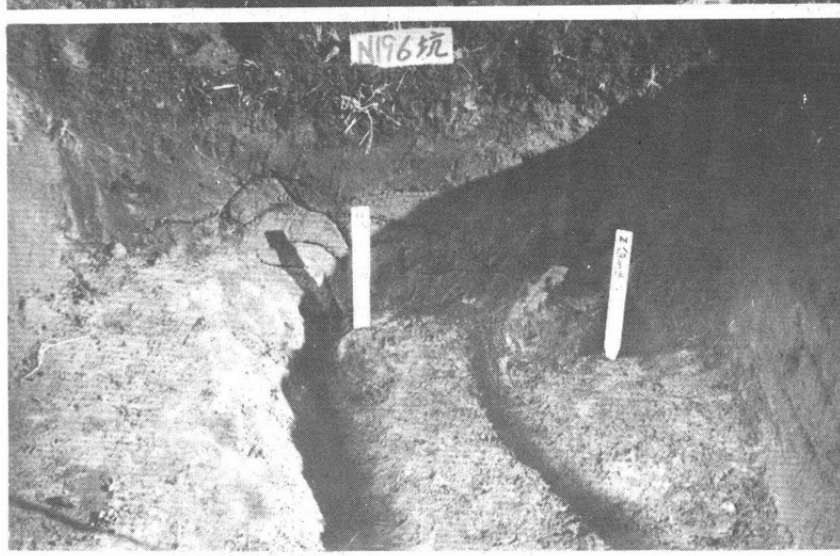
図版4



①112調査坑

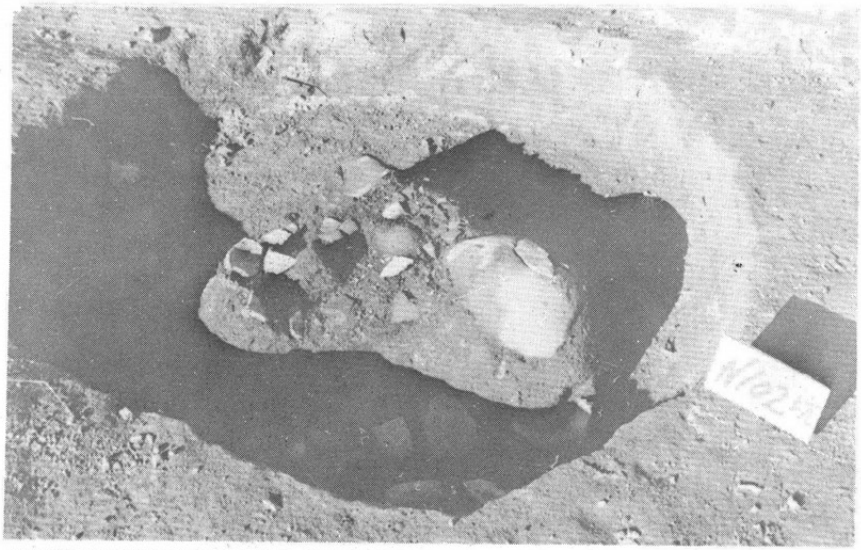


②161調査坑
65住



③196調査坑
82・84住

図版5

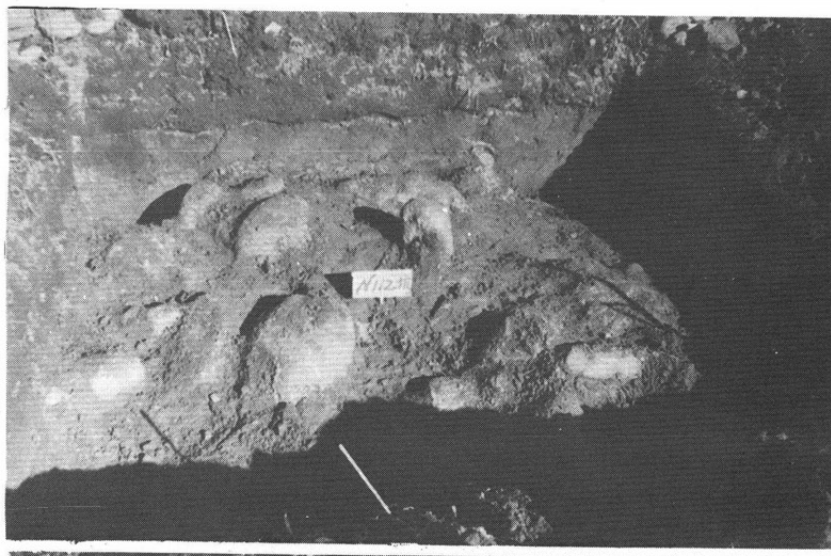


①102調査坑
弥生前期の
壺出土

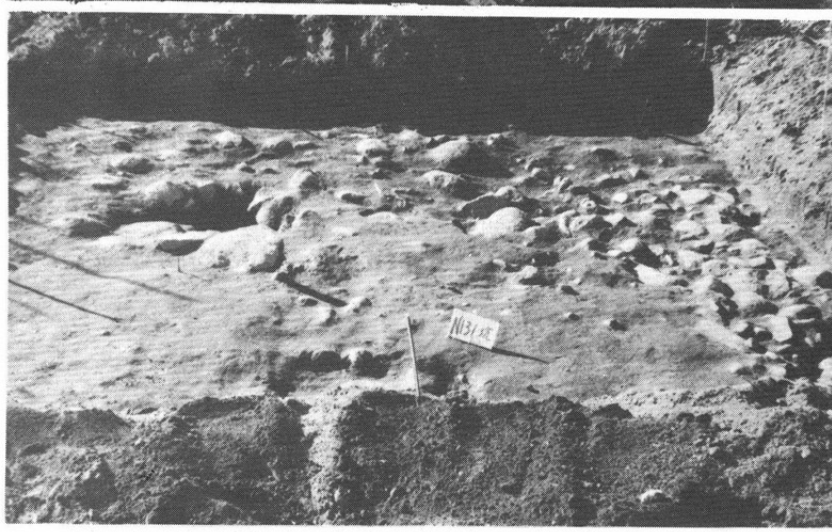
②86調査坑

③97調査坑

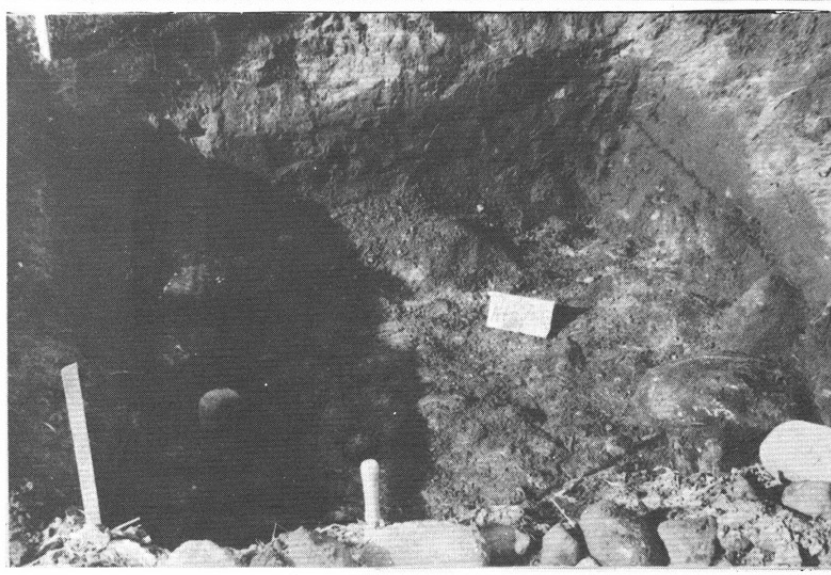
図版6



①112調査坑

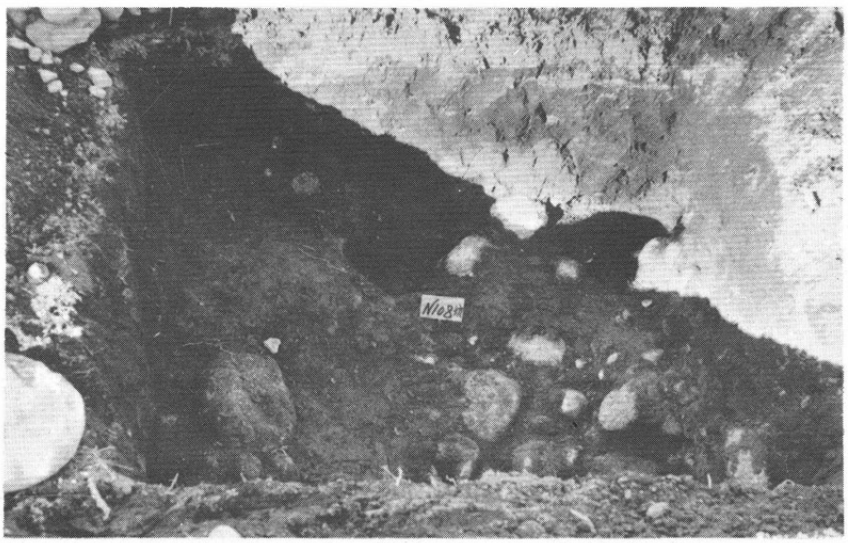


②131調査坑
縄文中期と
縄文後期が出土

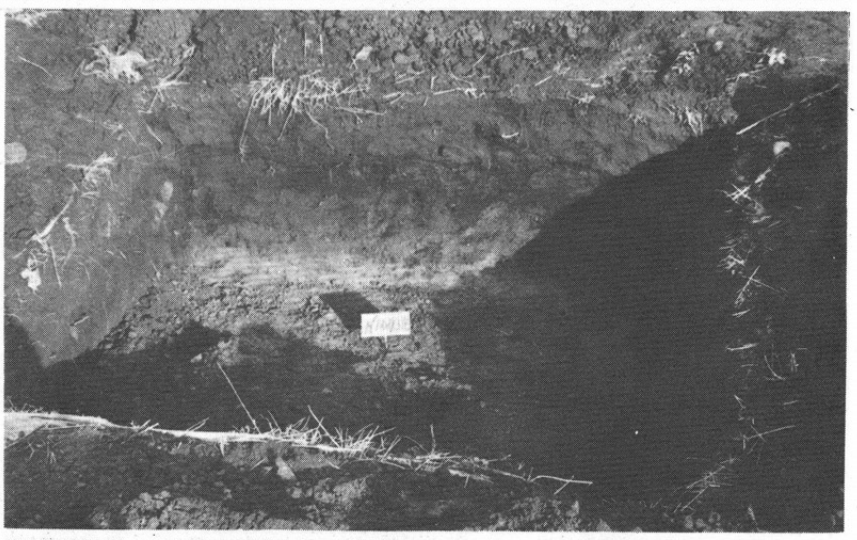


③137調査坑

図版7

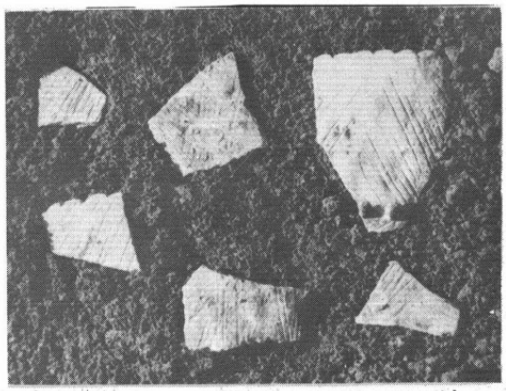


①108調査坑



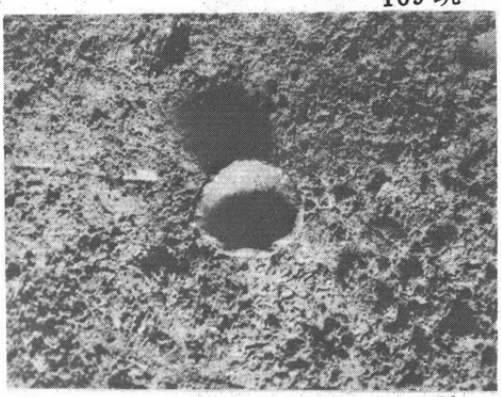
②104調査坑

③151調査坑
地層断面

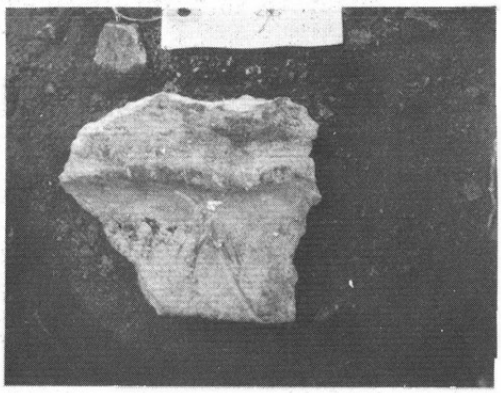


169 坑

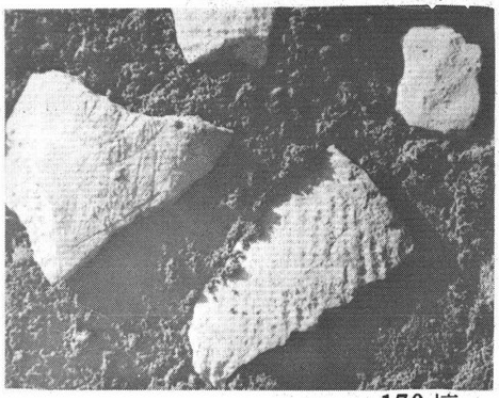
196 坑



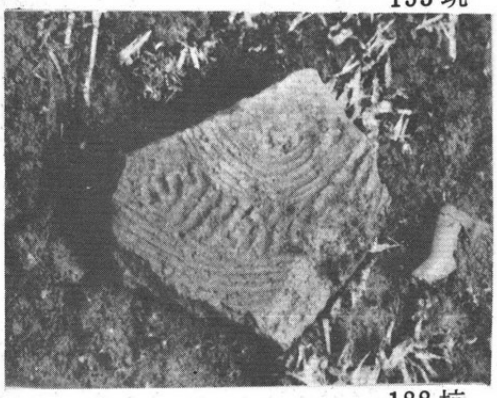
191 坑



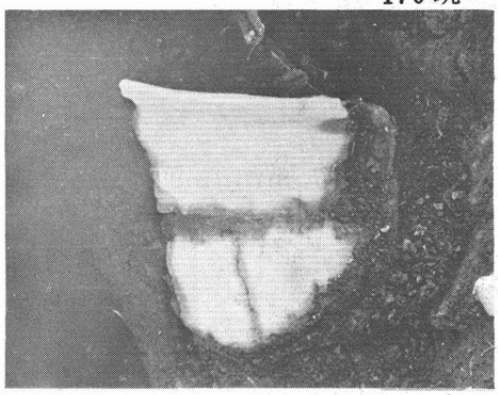
153 坑



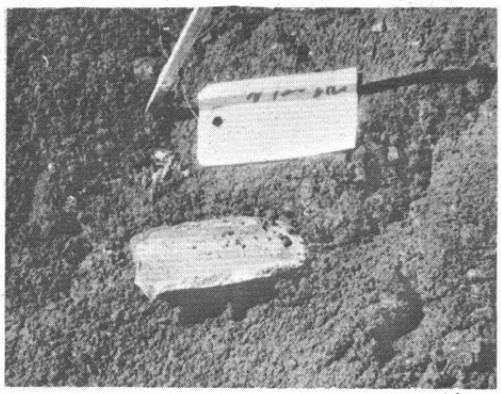
170 坑



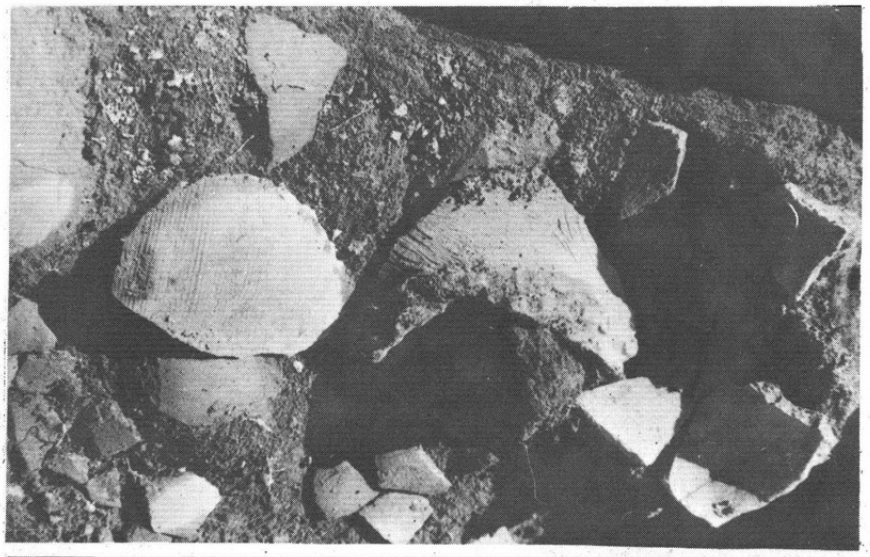
188 坑



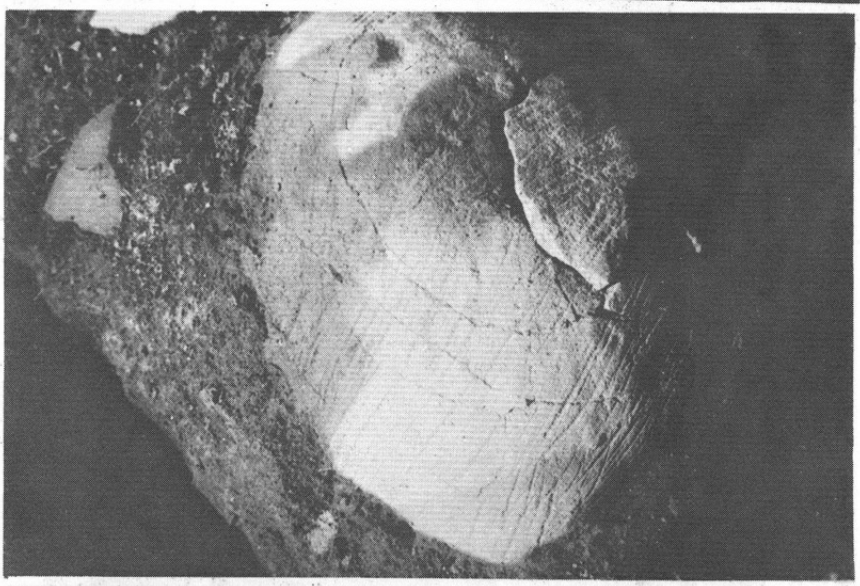
111 坑



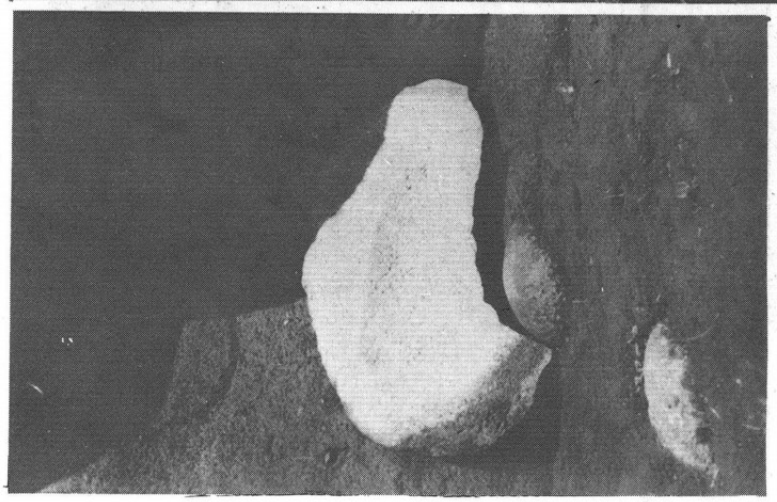
120 坑



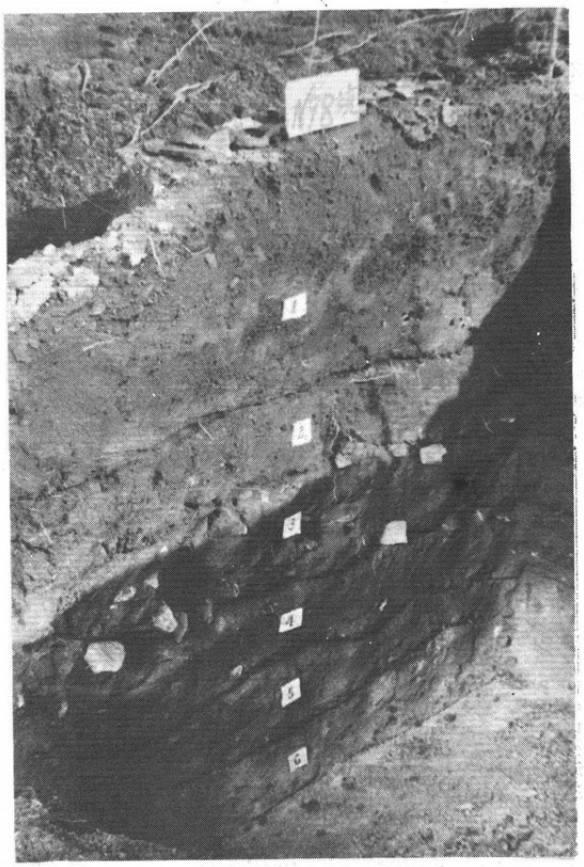
①102調査坑
弥生前期の土器出土状況



②102調査坑
弥生前期の土器出土状況

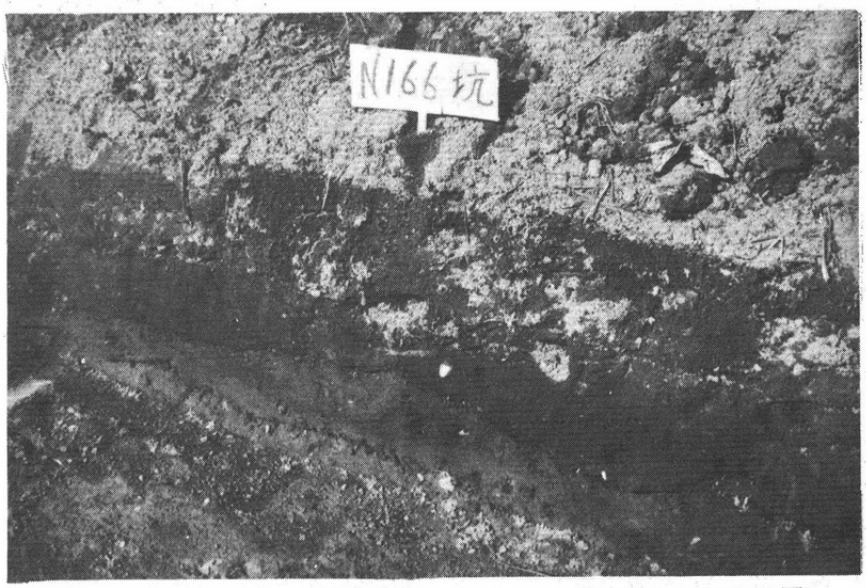


③120調査坑
石皿出土状況



① 98調査坑地層

② 169調査坑地層

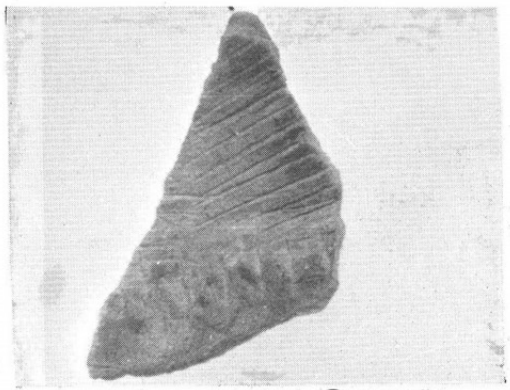


③ 166調査坑地層

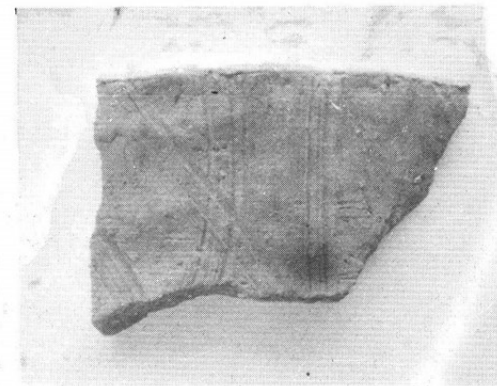
①第1区の調査状況

②第1区の調査状況

③第1区調査の測量



① 147坑

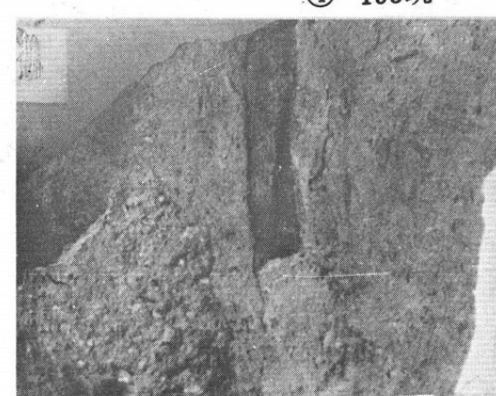


② 176坑

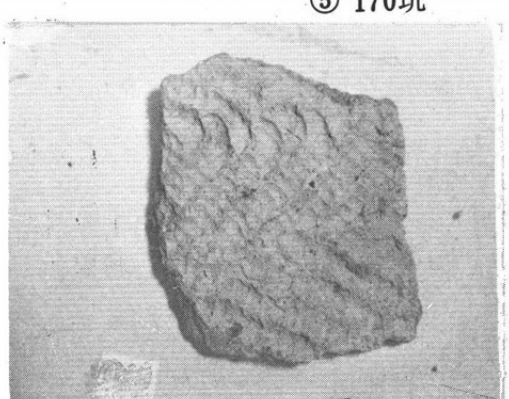
③ 180坑

④ 153坑

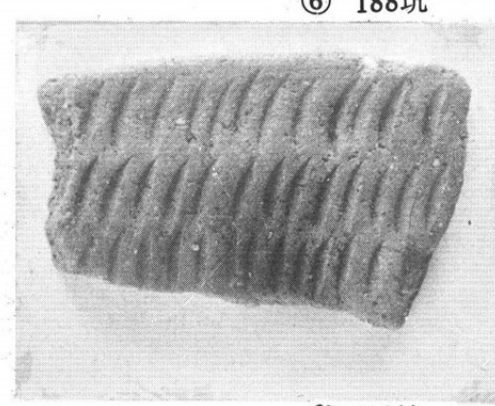
⑤ 170坑



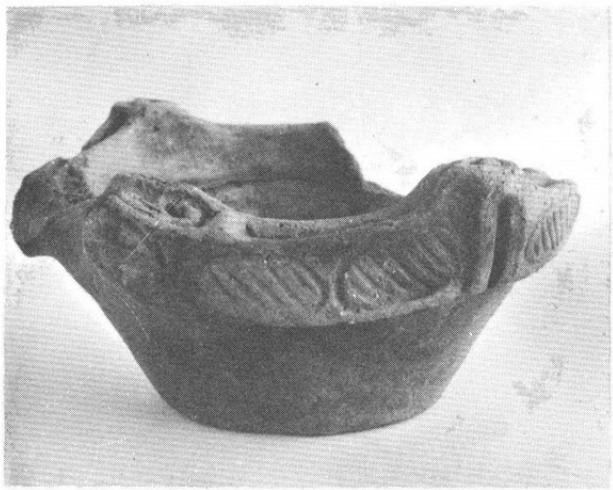
⑥ 188坑



⑦ 180坑

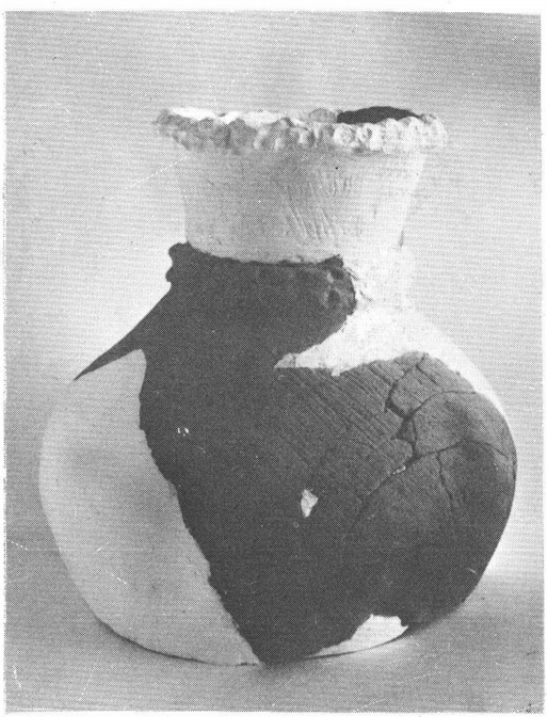


⑧ 188坑

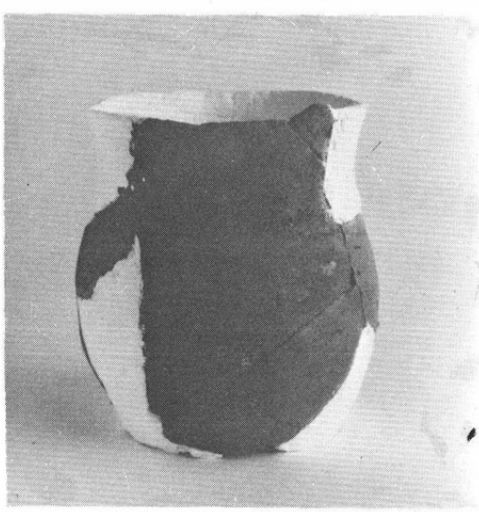


① 91調査坑

② 91調査坑



③ 102調査坑



④ 102調査坑

中越遺跡範囲確認調査報告

1979・3

編集　長野県上伊那郡宮田村教育委員会

発行　長野県上伊那郡宮田村教育委員会

印刷　長野県上伊那郡宮田村　宮田印刷